秘められた良心

――『踊りでボロボロになった靴』（KHM一三三）の深層心理学的解釈――

梅内幸信

第一節　詩的直観

江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』における主人公のように、天井裏の節穴から下の部屋を覗いたり[1]、あるいはアンリ・バルビュスの『地獄』における主人公のように、壁の細い亀裂から隣の部屋を覗いたりするとき[2]、人は誰でも、奇妙な快感を覚える。それは、単なる好奇心からくるものではなく、全能の創造神の高みにも昇る心境から発せられるものであると考えられる。つまり、覗いている者は、相手に自分の姿を知られていないところから、覗かれている者を必然的に下界の者、卑しい俗界の者と見なすのである。もちろん、これは、覗いている者が置かれている状況から生ずる錯覚に他ならない。隣の部屋の地獄を見る者の心も、それが長く続けば、恐らく地獄に変わるに違いない。しかしながら、事と次第によって、この状況が実際に全能の創造神の高みにも昇る心境を生みだす場合があると思われる。それは、童話の世界に密かに隠されている物語の亀裂から、心の秘密、あるいは大宇宙の神秘を垣間見るときである。

童話世界の因果関係は、現実世界のそれと対立関係にあるゆえに、童話において、蛙や狼が人間の言葉を話すといった

不可思議な出来事に出会ったとしても、それを奇妙なことだと感ずる読者はまずいない。読者は、童話世界に足を踏み入れるに当たって、まず童話世界の因果関係を受け入れ、むしろ読者は、不可思議な出来事を積極的に享受する。こうして読者は、安全な現実世界に立脚点を確保しておいたのちに、不可思議な出来事の起きる童話世界において、種々の美的にして、詩的な経験を積むのである。この関連において、読者は、童話世界に足を踏み入れるとき、現実世界と童話世界の緊張関係の中に置かれていると言ってよい。

ちょうど電気を帯びた天上の雷雲と地上の間に稲妻が発生するのと同じように、現実世界の因果関係と童話世界の因果関係との間には、往々にして詩的稲妻が発生して、これが童話の描写の中に、「物語の筋の歪み」ないしは「亀裂」をもたらす。そして、この物語の筋の歪み・亀裂が、読者の目に「奇妙なもの」として映ることとなる。童話の解釈者は、実はこの「奇妙なもの」に、まずは着目しなければならない。童話を深層心理学的に解釈しようとする場合、この奇妙なものが解釈の最初の糸口となる。つまり、この奇妙なものが、意識と無意識の緊張関係から生じた歪みの産物と見なされるのである。

二〇〇の童話が収められている『子どもと家庭のための童話』（Kinder- und Hausmärchen, 1812-57）の最終第七版（一八五七年）においては、奇妙なものが看取される童話がかなり見いだされる。その中でも、第一三三番目に置かれている『踊りでボロボロになった靴』[3]と題される童話には、「奇妙なもの」ばかりではなく、「神秘的なもの」さえも感得される。しかしながら、この神秘的なものが一体どこから発しているのかという疑問を解明する段になると、その解明の糸口は、そう簡単には見つからない。この神秘的なものは、恐らくこの童話の中に秘められている童話の智慧ないし民族の智慧からくるものであろう。そして、この智慧は、集合的無意識から受け継いだ心的エネルギーをもつリズムを発している。このリズムが、解釈者の無意識に共鳴して、神秘的だという印象を生みださせるのに違いない。とはいえ、集合的無意識の

リズムは、一解釈者の個人的無意識より一層深いところにある無意識の中から響いてきている。従って、たとえ、その集合的無意識のリズムに共鳴したとしても、解釈者が、その集合的無意識にまで下降して、それを探り当て、さらに、それを個人的無意識のレベルへともち帰ることは、かなり至難の業である。ただし、童話における「奇妙なもの」や「神秘的なもの」を感知する能力は、その解釈者の詩的直観に負うところが大きいと言わねばならない。しかしながら、幼年時代の純真無垢な心情をもう一度思いだし、その心情で童話を何度も読み返せば、人は誰でもその童話の中に秘められた心的リズムを感得できるはずである。

『踊りでボロボロになった靴』における王には一二人の姫があったが、これらの姫たちは、全員いっしょに一つの広間で眠らされていた。というのも、これらの姫たちは、夜中にどこかへ踊りに出かけて、一晩でその靴をボロボロに履きつぶしてしまうからである。王には、その理由が皆目見当がつかなかったし、また、誰に尋ねてもその理由を突き止めることができないままであった。「そこで、王さまは、姫たちが夜中どこで踊っているのかを探りだした者には、どの姫でも妻として選ばせ、自分の亡きあとは、その者に王位をゆずる、ただし、名のり出て、三日三晩たっても探りだせない場合には、命なきものとする、というおふれを出させ」(S.217)たのであった。この命がけの冒険に挑戦しようとする者が大勢現れるが、しかし、いずれも失敗に終わり、全員情け容赦もなく、首を刎ねられてしまう。ところが、ある日、「けがをして、もう働けなくなった、あわれな兵隊」(S.218)が王の都に向かっていると、一人のばあさんが、この兵隊に行き先を尋ねる。すると、この兵隊は、冗談半分に、「お姫さまたちが、どこで踊って靴をはきつぶすのか探って、それで王さまにでもなろうかと思っているんだがねえ」(S.218)と答えるのである。それにもかかわらず、このばあさんは、すぐさま、兵隊に姿の見えなくなるマントを与えたうえに、夜になって出されるワインを飲んではいけないという助言までをも授けるのである。

兵隊は、この助言に従って、その夜、一番年上の姫から出された眠り薬入りのワインを、顎の下にくくり付けたスポンジの中へ吸い込ませて、一滴も飲まず、狸寝入りをする。すると、一二人の姫たちは、豪華な衣装をまとって、めかし込み、その後はね上げ戸から地下へと降り、それから三つの並木道を通って湖へと出る。そこでは、一二人の王子たちが、それぞれ一艘の小舟に乗って、姫たちを待っているのであった。それぞれの姫が、めいめいの小舟に乗り込んで、向こう岸へと渡って行く。兵隊は、行きは一番年下の姫の小舟に乗り込む。一行は、向こう岸に着くと、そこにある城に入って、靴がボロボロになるまで踊るのであった。その帰りに兵隊は、一番年上の姫の小舟に乗り込み、いち早く自分の部屋へ帰って、熟睡しているふりを装う。姫たちのこの風変わりな行動に付き添って、兵隊は、二日目も三日目も共に地下の城へと向かうのであるが、しかし、兵隊は、その度ごとに、小枝を折って証拠としてもち帰り、三日目にはさらに、姫たちの用いたグラスを一個もち帰る。こうして、王に答えを言う段になって、兵隊は、証拠の品々を王に示して、どこで姫たちが夜中その靴を履きつぶしていたかを説明するのである。すると、姫たちも、嘘をついても無駄だと悟り、一切合切白状してしまう。その結果、王は、約束通り兵隊の希望する一番年上の姫を妻として与え、自分の亡き後、兵隊に王位を譲るのである。

この童話は、一読するとき、読者に奇妙だという印象を与えずにはいない。それというのも、この童話が短いものであるにもかかわらず、かなり多くの謎が発見されるからである。さらにまた、この童話における謎の渦からは、神秘的と思われる雰囲気さえ醸しだされている。とはいえ、この童話における神秘的なものを解明するには、かなり長い迂回路をたどる必要があると思われる。そこでまずは、この物語に見いだされる奇妙なものの解明を試みることから始めねばならない。この奇妙なものは、もう少し具体的に言い換えれば、「謎の提出」を意味している。謎に着目してこの童話を何度か読み返してみれば、その度に新たな謎が浮上してくる。主要な謎に着目するだけでも、以下のような七つの謎が列挙され

うる。

一、一二人の姫たちがどこで踊ってくるのかを突き止めた者に、なぜ「娘の一人を花嫁として選ばせ、自分の亡きあと、王位を譲る」などという途方もない報償を王は出すのか。しかも、名のり出て、それに失敗した者は、その首を刎ねられる。実際、すでに大勢の者たちの首が刎ねられてしまっている。

二、このような難問を、なぜ「けがをしてもうつとめのできなくなった貧しい兵隊」が解けるのか。

三、なぜグレート・マザーに相当すると思われる「おばあさん」が、いきなりこの貧しい兵隊に智慧を授け、「姿の見えなくなるマント」を与えるのか。

四、なぜ「一番年下の姫」が、兵隊の気配に気づくのか。そして、なぜ「一番年上の姫」が、「一番年下の姫」の不安を、その度に打ち消すのか。

五、なぜ兵隊は、証拠の品として、「三本の小枝」と「グラス」をもち帰るのか。

六、なぜ一二人の姫たちが、「地下の城」で王子たちと踊るのか。

七、なぜ一二人の王子たちは、魔法にかけられて、地下の世界にいるのか。

これらの謎を一気に解明することは、至難の業であろう。確かに、どれか一つの謎が解かれれば、それが誘発剤となって、その他の謎が次々と解かれてゆく可能性も存在している。しかし、この童話の場合、これら七つの謎は、どれもアレクサンドロス大王が一刀両断のもとに截ったと言われるゴルディオンの結び目[4]のように、もつれていて、そう簡単にその糸口を見つけだせるとも思われない。従って、ここでは、深層心理学の偉大な先達の用いたなんらかの方法を援用せざる

をえないと考えられるのである。

第二節　増幅法の応用

『踊りでボロボロになった靴』におけるもつれた謎の糸口を見つけるために有効だと思われる方法とは、C・G・ユングの提出する増幅法である。この方法をJ・ヤコービは、次のように要約している。

〈〔……〕すなわち増幅法とは、「原初形態への還元」reductio in primam figuram というフロイト的方法とは反対に、つまり後方に向って追求され、むりやり因果的に結びつけられ、隙間なく連続させられる連想を意味するのではなく、これは夢内容をそれに似た、可能な、類比的な諸像を用いて拡大し、膨らませることを意味する。さらに増幅法は自由連想法から、増幅においては連想が単に患者ないし夢を見た人からのみ提供されるのではなく分析者からも提示されるという点で、区別される。それどころかいろいろなアナロジーを提出することによって、患者の諸連想が辿って行くべき方向を決定するのは、しばしば他ならぬ分析者なのである。しかしもろもろの像やアナロジーがいかに多様であり得ても、それらは常に、解釈さるべき夢内容と意味深い、また多少とも密接な関係をもっていなくてはならない。そのことさえ顧慮されていれば、ここでは、自由連想が越えてはならないとされている限界を置くことも、自由連想が夢内容からそれ以上離れてはならないとされている距離を定めることも、なされることはない。[5]〉

ここにおいて、ユングの増幅法は、患者の自由連想ないし夢内容の解釈に関して応用されているが、言うまでもなく、

この方法は、童話の解釈にも応用されうるであろう。この増幅法とは、夢内容の解釈を考えるとき、特定の夢とこれと似たいくつかの夢を比較することによって、その類似点と相違点を見極めながら、それらの夢に共通する核心的部分を確定する方法と言い換えてもよいであろう。ただし、ここで念のために指摘しておかなければならない点は、この一連の操作によって特定の夢の核心的部分を確定することができた場合、やはり、もう一度その真偽を確認するために、「原初形態への還元」を試みなければならないということである。

さて、この増幅法を童話の解釈に応用することを視野に入れてみると、幸運なことに、増幅法を応用するにふさわしい資料が、J・ボルテとG・ポリーフカの注釈の中に見いだされる。それによると、『踊りでボロボロになった靴』は、初版の段階では、四七番目の童話として収められていたが、第二版において、一三三番目の位置に置かれたと言われる。また、この童話は、そもそもハクストハウゼン家を通じて、ミュンスターラントから採集された童話であり、グリム兄弟による手稿の段階では、『十二人のお姫さま』という題名であった。さらに、主人公である兵隊が自分の顎にスポンジをくくり付けて、それに眠り薬の入ったワインを吸い込ませる巧妙な趣向は、パーダーボルンから出た、もう一つ別の物語から採り入れたものであると言われる。[6]

通常であれば、この物語の概要全体をあえて引用する必要もないのであるが、しかし、この物語は、『踊りでボロボロになった靴』に増幅法を応用することによって、その核心的部分を確定するために、大いに役立つと思われる。そこで、J・ボルテとG・ポリーフカの注釈に載っている物語の概要を引用してみよう。それは、次のような物語である。

〈姫は、三人のみ登場するが、この姫たちの靴は、朝になると、きまってボロボロになって発見される。その理由を探りだした者には、一番末の姫を妻として与えるが、しかし、それができぬ場合には、命はない、というおふれが

出される。すでに、一二人の者たちが絞首刑にされてしまっているところで、第一三番目の挑戦者として兵隊が登場する。兵隊は、夜中に秘密の通路を通って、三人の姫たちの跡を付けて行く（姿を見えなくするマントを、まだ兵隊はもっていない）。三人の姫たちは、とある湖に出る。そこには三人の大男がいて、それぞれが三人の姫たちを肩車に乗せて、湖を渡り、赤銅城へ運ぶ。兵隊は、その城へ行くことができないでいると、一匹のライオンと一匹のキツネが目にとまる。ライオンとキツネは、一着のマントと一足の長靴をもっているが、これを身に付けると、望みのところへ行くことができる。ライオンとキツネは、どちらが魔法の品を手に入れるかで争っている。そこで、兵隊は言う。「向こうに三〇歩行って、そこから走ってこい。先にここに着いた方がもらうのさ。」ライオンとキツネが向こうへ歩き始めるやいなや、兵隊は、長靴を履いて、マントを羽織り、三人の姫たちのところへ行きたいと願をかける。兵隊は、自分の姿を見えなくすると、一番年上の姫のところへ行って、姫が口もとへ運ぼうとするものをすべて食べてしまう。食後踊りが始まる。そして、姫たちは、履いている靴がボロボロになるまで踊る。それから、大男たちが、再び湖を越えて姫たちを元のところへ戻す。兵隊がベッドの中に入りたいと願をかけるので、三人の姫たちは、兵隊がぐっすりと眠り込んでいる姿を発見する。二日目の夜も同じような事態となるが、城は白銀城で、兵隊は二番目の姫のもとへ行く。三日目の夜は黄金城で、兵隊は約束されていた三番目の姫のそばに座る。三日目に兵隊は、王に秘密をすべて打ち明けて、末の姫を妻にもらい、王の死後、王国を受け継ぐ。[7]〉

この類話を一読するだけで、「姫は、三人しか登場しない」とか、「兵隊は、マントをライオンとキツネから手に入れる」といった相違点が容易に発見される。増幅法を、さらにもう一度『踊りでボロボロになった靴』に応用する資料が、J・ボルテとG・ポリーフカの注釈に見いだされる。それは、ヘッセン地方から出ている第三の物語で、非常に特色のあるも

のである。それは、次のような物語である。

〈とある姫が、毎夜一二足の靴を履きつぶすので、毎朝一人の靴屋がやってきて、一二足の新しい靴の寸法をとり、日暮れになると靴を納めている。そのため靴屋は、一二人の職人を雇う。どうして靴が夜中に履きつぶされてボロボロになるのか、誰にも分からない。ある晩、職人たちの中の一番若い職人が靴を納めにくると、ちょうど姫がその部屋に居合わせないので、若い職人は、「どうして靴が履きつぶされてボロボロになるのか、突き止めなくちゃな」と考えて、姫のベッドの下へもぐり込む。夜の一一時に、床のはね上げ戸が開いて、一二人の姫たちが上がってきて、互いにキスしあって、新しい靴を履くと、皆いっしょに下へ降りて行く。自分の姿を見えなくすることのできるこの若い職人は、姫たちの跡を付ける。姫たちが湖に出ると、そこで船頭が姫たちを舟に乗せる。船頭は、「今夜は、いつもより舟が重いな」と言って、愚痴をこぼす。すると、「まあ」と、一二人の姫たちは言う、「でも、ハンカチ一枚だって、小包み一つだって、よけいにはもち込んでおりませんよ。」姫たちは、向こう岸に着くと、それぞれ異なる一二の花園に入り、めいめいが一つずつ花園を所有する。姫たちは、この上もなく美しい花々を摘み、それで身を飾りたてる。そうして、姫たちがとある城へ行くと、そこでは一二人の王子たちが姫たちを迎え入れ、彼女らと踊る。皆は浮かれはしゃいでいるが、ただ一人だけ他の姫たちと違って、悲しげな様子の姫がいる（まるで、この姫は、美しい靴屋の若者を見て、この若者に恋をしているかのようだ）。姫たちは、靴が履きつぶされてボロボロになったので、再び自分の部屋に帰る。自分の部屋に上がると、姫たちは、一二足の靴を窓から外へ捨てるが、外には靴が山のように積まれている。靴屋の若者は、そっと立ち去る。あくる朝、靴屋の親方がやってきて、姫のために新しい靴の寸法をとろうとするが、しかし、彼女はベッドに入ったままで、親方に出直すよう命じる。親方が出直してくると、

姫は、もう何足も靴はいらないから、一足だけ作って、それを親方のところにいる一番若い職人に届けさせて欲しい、と言う。しかし、この若い職人は、「ぼくは行かないよ。まずは一番上の兄貴の番さ」と言う。一番年上の職人が、めかし込んで出かける。しかし、姫は、その職人ではなく、一番若い職人をよこすよう言い張る。若い職人は、またもや「自分の番になるまでは、行かないよ」と言う。こうして、二番目の職人、三番目の職人という具合に、職人が次々と出かけ、一一人目の職人までが追い返されてしまう。そこで、一番若い職人は、「行かなくちゃならないのなら、このまんまのなりで行くさ。いい着物に着替えるなんて、ごめんだよ」と言う。若い職人が行くと、姫は、若者の首に抱きついて、「あなたは、あたしを一一人の姫たちから救いだしてくださったのです。彼女らに支配されて、あたしは苦しめられていたのです。心からあなたを愛しています。どうぞ、あたしをあなたの妻にしてくださいませ」と言う。[8]〉

この類話においては、最初の童話と同様「一二人の姫たち」が登場するが、しかし、主人公は靴職人に替えられており、しかも、靴職人も一二人登場している。これらの相違点と類似点を明確に把握するために、これら三種類の物語の異同を以下において、さらに詳しく比較検討してみる必要がある。

第三節　三種の物語の異同

さて、この段階に至って、『踊りでボロボロになった靴』（ＫＨＭ一三三）とパーダーボルンの類話、ヘッセン地方の類話という三つの物語が分析の対象として出揃っている。これら三種類の物語の類似点と相違点を明確にするために、（一）

主人公の職業、（二）姫の人数、（三）主人公の挑戦、（四）湖の渡り方、（五）追跡方法、（六）目的地、（七）難題、（八）褒美、という八項目に亙ってこれらの物語を吟味し、その結果を表にまとめてみると、次のようになる。

「類話比較表」

事項＼類話	『踊りでボロボロになった靴』A	バーダーボルンの類話B	ヘッセン地方の類話C
主人公の職業	けがをして、もう働けなくなった兵隊	兵隊	若い靴職人
姫の人数	一二人	三人	一二人
主人公の挑戦	おおぜいの者たちが失敗したのちに、兵隊が挑戦する。	一二人の者が絞首刑に処せられたのちに、一三番目の挑戦者として兵隊が登場する。	一一人の靴職人が姫に拒否されたのち、一番若い一二番目の靴職人が姫に受け入れられる。
湖の渡り方	姫たちは、王子たちのこぐ一二艘の小舟に乗って渡る。兵隊は、おばあさんからもらった姿の見えなくなるマントを身に着けて、一番年下の姫の小舟に乗り込んで渡る。	三人の大男が、それぞれの姫を肩車にして渡す。兵隊は、ライオンとキツネが手に入れようと争っているマントと長靴を手に入れて、一人で渡る。	一人の船頭がこぐ船に一二人の姫たち全員が乗って渡る。自分の姿を見えなくすることができる一二番目の靴職人は、一二人の姫と同じ舟に乗り込んで渡る。
追跡方法	おばあさんからもらった姿の見えなくなるマントを身に着けて追跡する。	初めは夜中に秘密の通路を通り、続いて手に入れたマントと長靴の力を借りて追跡する。	姿を見えなく出来るマントではなく、自分の姿を見えなくすることのできる能力で追跡する。
目的地	地下の城	一日目は赤銅城、二日目は白銀城、三日目は黄金城。	初めは一二の異なる花園へ、続いて城へ。
難題	一二人の姫たちがどこで靴を履きつぶ	三人の姫たちがどこで靴を履きつぶ	難題は誰かによって課されるの

	すかを探り当てる。	すかを探り当てる。	ではなく、若者が自ら突き止めようと考える。
褒美	兵隊は、一番年上の姫を選んで結婚し、王の亡きあと、王国を受け継ぐ。	兵隊に三番目の姫が妻として与えられ、兵隊は王の亡きあと、王国を受け継ぐ。	一一人の姫に苦しめられていた姫が、若者に自ら求愛する。

煩瑣を避けるために、今ここで、『踊りでボロボロになった靴』をA、パーダーボルンの類話をB、ヘッセン地方の類話をCと呼ぶことにしよう。これら三種の物語を比較吟味すると、この一覧表から、実に種々の興味深い事実が看取されてくる。それらの事実を、以下に簡潔に列挙してみよう。

一、AとBは、いくつかの相違点を別とすれば、かなり似た物語であると言える。その相違点は、次の三点である。（一）姫の人数（Aでは一一人、Bでは三人）、（二）地下の城（Aでは一つ、Bでは三つ）、（三）褒美（Aでは、主人公が一番年上の姫をもらい、Bでは一番年下の姫をもらう）。

二、Cの物語は、その他二つの物語とはかなり異なっている。その相違点は、次の五点である。（一）主人公の職業（Cでは若い靴職人であるが、その他の物語では兵隊）、（二）若い靴職人は、自分の姿を見えなくする能力を具えている（その他では、マントの力による）、（三）目的地（Cでは城に入る前に、一二人の姫がそれぞれの花園に入る）、（四）難題（Cでは誰かによって課せられるのではなく、若者が自ら謎を突き止めようと考えるのに反し、その他の物語では、王が難題を課す）、（五）褒美（Cでは姫が若者に自ら求愛するのに反し、その他の物語では、王が主人公に娘を妻として与え、自分の亡きあとに王位を譲る）。

この五つの相違点の中で、（四）と（五）の相違点は、かなり大きなものであると言わねばならない。それというのも、Cの物語においては、主人公にしろ姫にしろ、自らの自由意志に基づいて行動しているからである。他方、AとBの物語においては、主人公である兵隊の方は姫と結婚できることを願っているが、しかし、姫の方は兵隊との結婚を当初から望んでいるわけではない。

Cの物語がその他二つの物語とかなり異なっているという結果から、かなり重大な成果が得られると思われる。というのも、Cの物語における姫は、若い靴職人との恋に落ちた段階から、徐々にその他一一人の姫たちの意地悪を克服し始めているからである。この姫とその他一一人の姫たちとの関係を考察すると、その他一一人の姫たちとは、姫の分裂自我、すなわち姫の無意識の中に潜むトラウマから形成された人格ではないかという仮説が得られる。この仮説に基づくとき、自己のうちに一一人の人格を抱えるからには、姫は、相当な悩みをもっていたと想定せざるをえない。さらにここで、それら一一の人格が、姫が若い靴職人と恋に陥る段階から消滅に向かうという局面に着目すれば、そのトラウマとは、なんらかの意味において、姫の父親との関係において形成されたものであるという推測が可能となるであろう。このことを裏づけるかのように、三種の物語には、いずれにおいても母親が登場していない。

このように考察を進めるとき、Cの物語は、「人格の分裂と統合」というテーマにおいて非常に興味深い。この事実が得られれば、Cの物語ばかりではなく、実は、AとBの物語においても「人格の分裂と統合」というテーマが核心的部分を成しているのではないかという推測が可能となるのである。そうすれば、Aの物語に登場する一二人の姫たちは、一人の支配人格と一一人の分裂自我、Bの物語に登場する三人の姫たちは、一人の支配人格と二人の分裂自我、という具合に、これらの人物たちを、現実世界に近づけて、立体的に再構成してゆくことができるのである。

ここに至ると、「グリム兄弟は、なぜAの物語を最終的に選択したのか」という疑問も、同時に氷解すると思われる。

つまり、Cの物語は、やはり、何度も繰り返して読むと、人格の分裂、あるいは多重人格のテーマが浮上してくるので、それは子どもにとって、かなり難解な物語となるであろうし、また、このテーマは、幼い子どもにとって、教育上学ぶには早すぎるものであることが十分に理解されるのである。確かに、ボルテとポリーフカの注釈にあるBとCの物語の粗筋が、類話そのものと比較して、どこまで精確なものであるか定かでないので、厳密な分析は不可能である。しかし、それを承知のうえで、あえて言えば、Aにおける地下の世界の描写がBとCの物語における描写より優れていると推測される。また、「履いて願をかければ、どこにでも行ける長靴」は、少々安易な発想と言わざるをえない。さらに、この物語の展開からして、主人公は、姫たちと常に密着して行動する必要がある。というのも、主人公が象徴的に代表していると思われる良心は、悪徳行為においても常に身近なところにあるからである。

とはいえ、このように考察を進めてきても、Cの物語において、なぜ姫が一番若い一二番目の靴職人を選ぶのかという疑問を上首尾に解明できるとは思われない。ただし、姫がその若者に恋したという重大な局面を看過することができないことだけは確かである。また、若者が自らの自由意志で、褒美をもらうことなど当てにせず、ボロボロに履きつぶされた靴の秘密を探りだそうとしている点が、次の重要な局面を予感させていると思われてならない。

いずれにしても、『踊りでボロボロになった靴』において、本来「人格の分裂と統合」というテーマが問題になっているという局面が、もつれた謎を解く最初の糸口であるという点は、少なくとも確認されたと言えるであろう。このことは、間違いなくこの童話解釈における大きな成果であると考えられるのである。

第四節　人格の分裂と良心

『踊りでボロボロになった靴』において、本来「人格の分裂と統合」というテーマが問題になっているという局面が確認されれば、この童話における諸々の謎も、急速に解明されてくるように思われる。筆者は、以前『悪魔の霊液』に関する研究において「文学に見られる自己の分裂と統合」というテーマを追究した際、以下の八つのテーゼを提示した。

一、自己の分裂状態は、自己実現への一過程として不可避であること。
二、自己の分裂状態を認識し、正確に把握すること。
三、「知覚の束」を通じ、記憶によって自己の過去を再構成すること。
四、過去の再構成によって性格の連続性を獲得すること。
五、「私はAだ」という自意識を確立すること。
六、自意識の根底に良心があること。
七、より高い次元にある理想的人格との統合を図るために、低い次元にある支配人格が死の決意をすること。
八、自己の統合が図られる前に、対立原理を生み出す両極の一方を抹消してはならないこと。(9)

これら八つのテーゼは、自己の分裂と統合をテーマを扱う『踊りでボロボロになった靴』にも適用されうると考えられる。これら八つのテーゼを用いて、ここで簡単にこの童話を吟味してみることにしよう。第一のテーゼにおけるように、姫は、自己実現の途上において、一二の人格に分裂している。そうして、第二のテーゼにおけるように、兵隊との出会いを通じて、一番年上の姫と一番年下の姫との言い争いにおいて明確になっているが、自己の分裂状態を徐々に認識し始めている。また、姫たちが地下の城を訪れて踊りに夢中になるという行為からも判断されるが、姫たちは、第三のテーゼに

おけるように、「地下の城までの道筋」（知覚の束）を通じて、自己の過去を再構成している。同時に、「地下の城への行き帰り」において、一二人の姫たちが、一番年上の姫から一番年下の姫まで、常に順番に並んで進む場面から、第四のテーゼが該当することが理解される。さらに、第五のテーゼにおけるように、一番年上の姫が一二人の姫たちを統率する支配力を保持しているという点において、「私はAだ」という自意識をもっていることが分かる。そして、第六の「自意識の根底に良心があること」というテーゼは、『踊りでボロボロになった靴』という童話を解釈するに当たって、極めて重要な試金石になると言わざるをえない。それというのも、一番年上の姫の自意識の根底にある良心は、まどろんでいて、兵隊の強力な良心によるエネルギーの照射を受ける必要があったという局面が浮上してくるからである。

第七のテーゼにおける「低い次元にある人格が死の決意をする」とは、この童話においては、一番年上の姫が、自分たちの秘密が露呈したとき、もはや嘘をついたり言い逃れをせずに、兵隊の妻となる決意を固める場面に相当する。この場合、一番年上の姫の結婚は、「再生のための死」を意味している。そして、最後に、姫たちの秘密を探りだそうとする男性たちに眠り薬の入ったワインを飲ませて、自分たちの対極である男性たちの命を奪っている間は、第八のテーゼにおけるように、姫たちは、決して自己の統合を図ることができなかったのである。

このように、八つのテーゼでもって大ざっぱに『踊りでボロボロになった靴』という童話を吟味してみると、そこから比較的容易に引きだせる次に重要な手がかりは、兵隊が「良心」の化身ではないかという仮説である。この仮説を検証するために、A・B・Cそれぞれの童話において良心を暗示していると思われる箇所を、以下において摘出してみよう。

一、Aの物語において

（一）イメージとシンボルによる解釈学の観点から見ると、「兵隊」は、「勇敢さ」「防衛、警戒」「低い身分」、と

りわけ「奉仕、大義への献身」を象徴的に表している。[10]

（二）なによりも、グレート・マザーに相当する「おばあさん」が、なんのためらいもなく、小さなマントを与え、智慧を授けている点に着目しなければならない。勧善懲悪の精神が支配するグリム童話において、天からの援助が与えられる者は、常に善意の人間である。

（三）「王国」を受け継ぐ。「王」は、「人とその心とを治める原理、または自制」「神から権利と保護を与えられている人」を象徴的に表している。（イメージ・シンボル、三七三―三七四頁）

二、Bの物語において

（一）兵隊は、一三番目の挑戦者である。「十三」という数は、イメージとシンボルによる解釈学の立場から見ると、「縁起のよい数。元来聖なる数字なので、神霊が宿る」という意味をもっている。（イメージ・シンボル、六三二頁）

（二）兵隊は、地下で姫たちについて、一日目は「赤銅城」、二日目は「白銀城」、三日目は「黄金城」へと行く。これは、姫たちばかりではなく、兵隊の人格の発達段階を暗示していると考えられる。黄金城は、マンダラのイメージをもつものであり、それは、自己実現のシンボルでもある。

三、Cの物語において

（一）「十二」という数は、イメージとシンボルによる解釈学の観点から見ると、「宇宙の秩序と関連」「一年の月の数」「昼と夜は、それぞれ十二時間ずつである」「救済、神聖に関連」といった象徴的意味をもっている。

興味深い点は、この数の前後に位置する一一と一三に関連して、「人間と関連、心霊的了解の場をつくりだすのには、十二人という人数が一番手頃な数と思われたのであろう。それで十二が、十一とか十三という近い数と関連をもつようになった。グループは十一人＋頭目か、十二人＋頭目となろう」といった発想が可能となる局面である。（イメージ・シンボル、六五七-六五八頁）

（二）若い靴職人は、自分の姿を見えなくする能力を具えている。

（三）若い靴職人は、めいめいそれぞれの花園に入った姫を同時に観察できる透視能力をも具えているように思われる。

（四）若い靴職人は、自ら秘密を突き止めようと決意する。

（五）若い靴職人は、めかし込まず、ありのままの姿で姫のもとに向かう。

これらの中で兵隊が良心の化身であるということを示す最も大きな特徴を選定すると、それは、次の三点であろう。これら三つの大きな特徴を解明できれば、これに伴ってその他の特徴は、自ずと解明されてくるように思われる。

一、兵隊は、奉仕、大義への献身を象徴的に表している。

二、兵隊は、一三番目の挑戦者である。

三、兵隊は、自分の姿を見えなくするマントをもっている（若い靴職人は、自分の姿を見えなくする能力を具えている）。

グレート・マザーに相当する「おばあさん」が、いともたやすく援助の手を差し伸べるという状況を考慮に入れると、兵隊が極めて善良な人間であると考えざるをえない。この意味において、兵隊が良心の化身であるということは、比較的容易に推測がつくであろう。ただし、「兵隊が大義への献身を象徴的に表しているということ」「兵隊が一三番目の挑戦者であることの意味」、とりわけ「兵隊が自分の姿を見えなくすることができるということ」は、良心の特徴とどのように結びつくかが、説得力をもって説明されることが不可欠である。

第五節　秘められた良心

「良心」を具体的に考察するためには、倫理学において「良心論」と呼ばれる分野を、いささかなりとも渉猟してみる必要があろう。ここで有益と思われる文献は、『良心　道徳意識の研究』[11]である。この編者である金子武蔵氏が書いた序文では、「惻隠の心」「羞悪の心」「恭敬の心」「是非の心」という「四端」をもたぬ者は、仁義礼智の行ないをなしえないという孟子の思想が紹介されている[12]。果たして、『踊りでボロボロになった靴』の主人公である兵隊に、これらの「四端」が具わっているかどうかを、強靱な筆致でもって極めて単純に描写される童話において確認できるかは、非常に心もとない[13]。しかしながら、善意に解釈すれば、兵隊が偶然出会った老婆の言葉に耳を傾け、その助言に素直に従うところから「恭敬の心」を、「ボロボロになる靴」の秘密を抱えて悩んでいる王に助力を申し出ているところから「惻隠の心」を、王の心配をよそに、地下の城で靴を履きつぶしてしまう姫たちの身勝手な行動を暴こうとするところから「是非の心」を、自分がもはや若くないことを認め、地下の城での踊りへ出かける一二人の姫たちの一番年上の姫を妻に求めるところから「羞悪の心」を予感することは、ある程度可能なことであろう。

また、その同じ序文では、英語において「良心」を意味しているconscienceという語は、本来ラテン語では、con-scioという動詞から派生し、「共に知ること」を意味していたという語源が述べられている。[14] この意味において、conscius が名詞であるとき、それは、「或ることを自分と共に知っている人」であり、従ってまた、場合によっては、「証人」でもあり、「共謀者」であるとも言われる。[15]

ところで、ドイツ語におけるGewissenは、古高ドイツ語のgiwizzanî に由来している。[16] そして、「この語はじつはザンクト・ガレンの修道院付神学校の教師ノートカー（約八四〇-九一二年）がconscientiaの逐語訳として用い始めたものであり、そうしてconscientiaのほうも旧約聖書を七十人訳から、新約聖書をギリシャ原文から翻訳したゴート人の司教ウルフィラス（約三一一-三八三年）によってσυνείδησις にあたるものである」[17] と言われる。このギリシア語もまた、「他人と共に知ること」を意味している。[18]

ここで問題となるのは、良心が本来「他人と共に知ること」を意味しているにしても、その「他人」が一体どのような他人であるのかということである。「他人」がある一人の他人であるとすれば、それは、すでに上述したように「証人」や「共謀者」を意味することになるかも知れない。また、もし「他人」が特定の集団であるとすれば、それは、「共同体」や「社会」を意味することになるかも知れない。この場合に良心は、社会学的な意味をも獲得するに違いない。さらに、「他人」がある一人の他人であり、しかも、神を意味するとすれば、それは、宗教学的な意味を獲得するであろう。このように考えてみただけでも、「良心の問題」に関しては、古代ギリシアにおけるソクラテスやアリストテレス以来、中世・近代を経て、現代に至るまで、多くの哲学者・思想家たちによって極めて種々の見解が提出されているであろうという予測が得られるのである。事実、『良心　道徳意識の研究』と題された書物の中で「良心」は、キリスト教は言うまでもなく、ルター（Martin Luther, 1483-1546）、カント（Kant Immanuel, 1724-1804）、ニーチェ（Nietzsche, 1844-1900）、ショー

ペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）、西周（Amane Nishi, 1829-1897）、シュトーカー（H.G. Stoker）、カール・バルト（Karl Barth, 1886-1921）、ハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）といった哲学者・思想家たちに関連づけられて論じられている。さらに、中村正雄氏は、『良心の自由――倫理学的考察――』[19]という著書において、「良心の自由」という問題が提出する極めて多くの局面について考察している。

筆者は、ここで良心論を展開するつもりはない。ただし、良心論の歴史的概観を把握することによって、良心論におけるいくつかの興味深い見解を確認しておきたい。第一に、良心を「証人」と把握する見解からも分かるように、ホッブズのように、良心を「内面の法廷」と把握する見解が存在していることである。[20]第二に、キリスト教の倫理におけるように、神との関連において、〈同一の自己の内に自己自身の行為について知るものと知られるものとの関係が成立し、しかもそれは単に自己意識的な共知の構造をとるにとどまらず、同時に両者は「裁くもの」と「裁かれるもの」という相互に対立し葛藤するものでなければならない[21]〉という見解が存在することである。この二つの見解は、ほぼ同じと思われる。ただし、筆者としては、これら二つの見解と似たような見解ではあるものの、もう一つ別な観点からの見解を提出したい。それは、良心における「自分と他人」を、自己の内における「意識と無意識」と把握する見解である。この見解は、良心の働きを「超自我の機能[22]」と把握するフロイトの見解の延長線上に位置するものである。

ところで、人格の分裂と統合という問題が扱われているエドガー・アラン・ポーの『ウィリアム・ウィルスン』においては、主人公と全く同姓同名の人物が登場する。このウィリアム・ウィルスンが、主人公の意志に服従することを拒み、彼のあらゆる命令に干渉するのである。主人公は、当惑するが、しかし、彼に負けまいと必死の努力をする。ウィルスンの我慢のならない反抗精神が主人公を絶えず不安にさせるのではあったが、しかし、それでいて主人公は、彼を憎む気にはなれないのである。それどころか、彼は、ときとしてウィルスンに尊敬の念すら感じる。ウィルスンと主人公は、精神

的にも肉体的にもよく似ている。ただ一つだけ違うところは、ウィルスンは「咽喉に悪いところがあって、そのためにどんなときでもごく低いささやき以上に声を高めることができなかった」[23]ということである。にもかかわらず、ウィルスンは、なみなみならぬ眼力をもち、主人公の言動を模倣し、主人公が愚かな振る舞いをしようと思ったり、悪徳に陥ろうとするときには絶えず、そのささやきでもって忠告するのであった。主人公は、度々ウィルスンの傲慢さに堪えたのであったが、しかし、学校生活が終わるころになると、積極的に憎悪の念を抱くようになる。

主人公がイートンの学生になってウィルスンから離れると、彼は、放縦な生活に耽り、乱交を続ける。こうして、主人公は、悪徳の道を突き進むのであるが、ことあるごとにウィルスンは、主人公の悪事を暴いてしまう。ついに、ローマの謝肉祭の折りに起きた出来事において堪忍袋の緒が切れた主人公は、今度ばかりは退かず、ウィルスンを控えの間に引きずり込み、決闘を強要する。主人公は、ウィルスンの胸に何度も剣を突き立てる。このとき、控えの間の扉の錠が開けられる気配がしたので、主人公は、誰も外から入って来られないように処置したうえで、再び瀕死のウィルスンのところへ戻ってくる。しかし、そのとき血塗れの顔でよろよろと主人公に近づいてきたウィルスンは、今度はささやきではなく、まるで主人公自身がしゃべっているかのように、はっきりとこう言うのであった。

「お前は勝ったのだ。己は降参する。だが、これからさきは、お前も死んだのだ、――この世にたいして、天国にたいして、また希望にたいして死んだのだぞ！　己のなかにお前は生きていたのだ。――そして、己の死で、お前がどんなにまったく自分を殺してしまったかということを、お前自身のものであるこの姿でよく見ろ」[24]

ウィルスンは、同姓同名の主人公に常に付き添い、「ささやき声」で警告を発し、主人公の悪事を暴こうとする点にお

いて、まさしく「内面の法廷」における検事の役割を果たしている。このことから、ウィルスンが良心の化身であることは、一目瞭然である。ここで注目しておかなければならないことは、良心の化身であるウィルスンが「主人公に常に付き添っている」点である。熟考すれば難なく理解されるところではあるが、良心は、悪事に走る主人公の無意識の中にも存在しているのであるから、「その姿は見えないものの」、間違いなく、その人の中に存在しているのである。

このように考察を進めてくると、良心は、本来的に「自分の姿を見えなくする能力をもっている」と言っても、それは決して的外れな考えでないことが理解されるであろう。これと同時に、良心が「内面の法廷」において検事の役割を果たすという局面を捉えれば、「兵隊は、奉仕、大義への献身を象徴的に表している」という特徴も、今や十分理解されるであろう。ただし、「兵隊は、一三番目の挑戦者である」という第二の特徴に関しては、さらに考察を推し進めなければならない。

イメージとシンボルによる解釈学の立場から見れば、「十三」という数には「神霊が宿る」（イメージ・シンボル、六三二頁）と言われる。兵隊が一三番目の挑戦者であり、同時に「良心の化身」であることを考慮に入れると、「良心の中に神霊が宿る」ことは容易に理解される。なんといっても、良心は、人間と神とを結ぶ接点に他ならない。さらに、「十三」という数をイメージとシンボルによる解釈学の立場から見れば、この数は、「十一（人）、十二（人）、十三（人）という霊的な暗号をもっていて、集団を作るのに好ましい数である」（イメージ・シンボル、六三二頁）と言われる。『踊りでボロボロになった靴』において、一二人の姫たちが登場し、一三番目の人間として、これら一二人の姫に付き添い、最終的に姫と結婚する兵隊という数字の組み合わせを考慮に入れれば、さらに興味深い解釈が可能となると思われる。つまり、「一二＋一＝一三」という数式においては、最後の一人が「頭目」であると言われる（イメージ・シンボル、六五七―六五八頁）点を踏まえれば、兵隊は、一二人の姫たちを導く者に他ならない。兵隊がこの童話においてアニムスのシンボルに

相当することを加味すると、アニマにおける一二の人格を統合するものは、異質の要因であるアニムスに他ならないということになる。同時に、ここにおいて、兵隊が良心の化身であることを認めれば、分裂自我を統合する契機ないし基盤となるものこそ良心であるということが判明する。

このように考察してくると、『踊りでボロボロになった靴』において、一二人の姫の人格が兵隊という男性によって統合される過程が描かれていると解釈できるであろう。この関連において興味深いことは、この逆のパターンが見られるグリム童話が存在していることである。それは、『十二人兄弟』（ＫＨＭ九）であるが、ここにおいては、一二人の兄弟の人格が妹という女性によって統合される過程が描かれていると考えられる。このことに基づいて、あえて大胆な一般化を試みるとすれば、「人格の分裂は、その人の良心を共通基盤として、異性によって統合される」ことになる。

第六節　ゴルディオンの結び目

最後に、グリム童話『踊りでボロボロになった靴』を読んだときに提出されている七つの謎を、もう一度取り上げて、簡単に解明してみたい。当初、ゴルディオンの結び目のように思われた謎も、これまでの分析と考察によって、だいぶ結び目もほぐれてきているように見受けられる。

一、一二人の姫たちがどこで踊ってくるのかを突き止めた者に、なぜ「娘の一人を花嫁として選ばせ、自分の亡きあと、王位を譲る」などという途方もない報償を王は出すのか。しかも、名のり出て、それに失敗した者は、その首を刎ねられる。実際、すでに大勢の者たちの首が刎ねられてしまっている。

二、このような難問を、なぜ「けがをしてもうつとめのできなくなった貧しい兵隊」が解けるのか。
三、なぜグレート・マザーに相当すると思われる「おばあさん」が、いきなりこの貧しい兵隊に智慧を授け、「姿の見えなくなるマント」を与えるのか。
四、なぜ「一番年下の姫」が兵隊の気配に気づくのか。そして、なぜ「一番年上の姫」が、「一番年下の姫」の不安を、その度に打ち消すのか。
五、なぜ兵隊は、証拠の品として、「三本の小枝」と「グラス」をもち帰るのか。
六、なぜ一二人の姫たちが、「地下の城」で王子たちと踊るのか。
七、なぜ一二人の王子たちは、魔法にかけられて、地下の世界にいるのか。

最初の謎を解明する前に、一つ確認しておかなければならないことがある。それは、王の年齢に関する事柄である。この童話において、王の年齢に関する詳細は述べられていない。しかし、王に一二人の姫がいるという前提に基づけば、王が二〇歳で結婚して、毎年姫が一人ずつ誕生したとしても、三二歳になる。しかも、一番年下の姫でさえ、姉たちに付き従って踊りに出かけるのであるから、一番年下の姫でも、思春期を迎える一五歳に近づいている年齢であると考えざるをえない。そうであるとすれば、王の年齢は、五〇歳に近づく。さらに、姫たちが夜中どこかで踊って、毎夜靴をボロボロに履きつぶす理由を探りだした者に、どの姫でも妻として選ばせ、その者に王位を譲るというおふれを出させる箇所から、なにかしら老人の心配性が認められるし、かなりの年配になっていて、早く世継ぎが欲しいという願望も看取される。そうすると、王の年齢としては、自分の体力に自信をもてなくなる五五歳前後の年齢を想定した方が適切だと思われる。
また、この童話において、王の妃に関する言及が全く見られない。従って、妃は、最後の姫を産んだのち、まもなく死

んだものと推測される。一二人の姫たちが、兵隊が現れるまで一人として結婚していないのであるから、これらの姫たちは、父親である王との関係において、なんらかのトラウマを抱えていたものと考えられる。その一般的に想定される原因は、エディプス・コンプレックスであろう。しかも、一二人の姫たちが一二の多重人格を暗示させているとすれば、そのコンプレックスは、かなり深刻なものであると考えざるをえない。恐らく、この王は、イバラ姫の父親と同様、これら一二人の姫たちを「箱入り娘」として、極めて厳格に育て上げたのであろう。いうまでもなく、男性との結婚前の交際は厳禁であったに違いない。この厳格な教育によって、姫たちは、自分たちの異性に対する恋愛感情を抑圧したと思われる。しかしながら、思春期を過ぎてまでも、この恋愛感情を抑圧することは、かなり無理があると言わねばならない。この意味において、無意識における異常なまでの抑圧が、姫たちを「地下の城」での舞踏に駆り立てたと考えられるのである。

王は、娘たちを過度に厳格に育てたその悪しき結果を、老いて、行き先長くないと判断される時期になって我が身に引き受けねばならないのである。未だに結婚できないで、しかも、不可解な行動をとる娘たちに、老いた王としては、かなりの焦燥感を覚えたに違いない。王が自分の国を継承する世継ぎを求めることも、もっともなことである。しかし、このような王の置かれた状況から見て、王が有能な男性であるとしても、決して「老賢人」のイメージをもっている男性とは考えられない。

第二と第三の謎は、今や比較的容易に解明されるであろう。兵隊が「けがをして、もう働けなくなっている」ところから、彼は、かなり人生経験を積んでいると見なされるし、また、グレート・マザーに相当する「おばあさん」から、出会うやいなや姿の見えなくなるマントと助言を授けられているところから、「大義に奉仕する無欲の人間」と見なされる。しかも、これまでの考察から得られたように、「良心」の化身であるとすれば、この兵隊に神の心的エネルギーが強力に注入されることは間違いない。

第四の謎は、一二人の姫たちが、実は一人の姫の無意識における抑圧から形成された一二の人格、すなわち分裂自我であることを前提として、もう少し分析を続ければ、やがて解明されるであろう。一番年下の姫が、地下の城への道中、そして、城における舞踏の途中で物音に脅えたり、グラスの中のワインが誰かに飲まれるのを不安に思ったりする様子から、さらには、一二の人格の中でも、かなり敏感で神経質な特性から、この一番年下の姫の中に「良心の呵責」がまどろみながらも隠れていると判断される。この「良心の呵責」の不安を絶えず打ち消す一番年上の姫は、ちょうどイヴ・ブラックのように、[25]一二の人格における「無責任で」、「遊びが大好きで」、「男性を吸引する魅力があり」、「気まぐれで」、「社交的」な人格を代表している。このイヴ・ブラックのような姫は、良心の呵責を代表するイヴ・ホワイトの行動を、ことあるごとに邪魔するのである。この意味において、一番年上の姫と一番年下の姫とは、本来一体のものであると言える。

第五の謎は、自己実現の問題と関係しているように思われる。地下の城に向かう前に、一二人の姫たちは、まず「木の葉が全部銀でできている並木道」を通り、続いて「木の葉が全部黄金でできている並木道」を通り、最後に「木の葉が全部ダイヤモンドでできている並木道」を通り抜ける。その度に兵隊は、証拠の品として、その小枝を折り取るのである。姫たちの向かう城が自己実現のシンボルであるマンダラを想起させる。事実、城の中で行なわれる舞踏は、そもそも「人間の創造的進化への欲求」[26]を象徴的に示していると考えられるのである。そうすると、その城に向かう前にたどらなければならない三通りの並木道は、自己実現に至る三つの過程を暗示していると解釈されるであろう。「銀」の木の葉は「曇りのない良心」（イメージ・シンボル、五八一-五八二頁）を、「黄金」の木の葉は「究極の英知」（イメージ・シンボル、二八七-二八八頁）を、「ダイヤモンド」の木の葉は「不屈の信念」（イメージ・シンボル、一七三-一七四頁）を象徴的に示している。この三種の特性は、すべて人間の自己実現にとって欠かせないものである。ところが、一二人の姫たちがこの三通りの並木道を何度となく通り抜けていたにもかかわらず、姫たちには、未だにこの特性が身に付いているとは思わ

れない。小枝を折り取ることのできる兵隊のみが、これらの特性をすでに身に具えていると考えられる。兵隊は、それらの小枝を無造作に折り取るのである。これらの特性を無造作に習得することは、「良心」の化身である兵隊にしかできない業である。また、「グラス」（dt. Becher）は、当然のことながら、「聖杯」のイメージを喚起する。従ってまた、「聖杯伝説」との関連も想起される。「聖杯」が魂の探究を象徴的に示し、同時にこのことが「精神の上昇の一つの手段」（イメージ・シンボル、二九二頁）であることを勘案すれば、兵隊が地下の世界から「小枝」と「グラス」を証拠の品としてもち帰り、これによって一二人の姫たちの「精神の上昇」を願っているという兵隊の真意が十分に理解されるであろう。

第六の謎と第七の謎は、互いに関連しあっている。まず、一二人の姫たちが一二人の王子たちと踊る理由は、思春期を過ぎて益々高まる異性への憧れの念を解消するためである。「舞踏」は、前述したように、「人間の創造的進化への欲求」を象徴的に示しているゆえに、姫たちの異性への憧れの念を解消する行為は、同時に、創造的進化ないし自己実現への願望を表現している。とはいえ、その行為は、姫たちが毎夜その靴を履きつぶすのであるから、「靴」が「快楽」（イメージ・シンボル、五七七頁）を象徴的に示しているとすれば、単なる欲求不満の解消に終わった可能性がある。唯一、姫たちの舞踏が自己実現の過程において、なんらかの進展を見せたとすれば、それは、「良心」の化身である兵隊が付き添って行った三回に亙る舞踏においてであると推測される。良心を欠いた自己実現の試みは、所詮空しいものと言わざるをえない。兵隊の付き添った三度の舞踏において、「良心の呵責」（一番年下の姫）は度々目覚まされ、「遊び好きの衝動」（一番年上の姫）は相当解消されたと思われる。従って、真実が明るみにだされたとき、一番年上の姫は、「曇りのない良心」に照らして嘘をつかず、「不屈の信念」をもってすべてを告白するのが「究極の英知」であることを、ついに理解したのである。

最後に、地下の城で姫たちを相手として踊る一二人の王子は、一二人の姫たちとは対極に立っていると考えられる。つ

まり、王子たちは、姫たちとは完全に逆に、「母親に甘やかされて育った自堕落な若者」であると想定される。これらの王子たちが魔法にかけられているということの意味は、まさしくアニマと正しく接することができないという点にあると言わねばならない。王子たちは、ちょうど中世ヨーロッパにおいて最盛期を迎えたミンネ・ディーンスト[27]のように、アニマとの接し方を学ぶために、まずは試練として、一二人の姫たちに「精神的に奉仕」しなければならないのである。単に快楽に耽るのではなく、禁欲的かつ精神的に姫たちに奉仕しなければならないのである。しかしながら、甘えん坊で、自立精神の身に付いていない王子たちは、姫たちと踊っても、快楽に耽って姫たちの靴を履きつぶさせてしまったがゆえに、姫たちと踊ったその分の日数だけ、さらに魔法にかけられたまま、地下の城でミンネ・ディーンストに励まねばならない定めにある。

このように、この『踊りでボロボロになった靴』という童話を解釈してみると、人格の分裂と統合というテーマは、創造的進化に運命づけられている人類に課せられた普遍的な難題であるとはいえ、この難題は、異性原理の不可欠性と良心というキー・ワードさえ忘れなければ、必ずや解決されるものであることが明確に認識されるのである。

注

(1) 江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』、『江戸川乱歩全集　第一巻』所収、講談社、一九七八年、参照。

(2) バルビュス、アンリ『地獄』飯島耕一訳、東西五月社、一九六一年、参照。

(3) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980, 2.Bd., S.217-221. 以下、この童話からの引用に関してはこの版に従い、本文引用末尾に頁数を付す。なお、翻訳に当たっては、次の最終版の翻訳を参考にさせて頂いた。『グリム童話集（四）』金田鬼一訳、岩波書店（文庫）、一九八一年、九七－一〇九頁。／『完訳グリム童話』（一－七）第六巻、

野村泫訳、筑摩書房、二〇〇〇年、一九-二六頁参照。

(4)『日本大百科全書　一』小学館、一九九四年、八四三頁参照。／高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、一九六九年、一二八頁参照。

(5) ヤコービ、J.『ユングの心理学』高橋義孝監修、池田紘一・石田行仁・中谷朝之・百渓三郎共訳、日本教文社、一九八〇年、一五三頁。

(6) Vgl. Bolte, Johannes / Polívka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 4 Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim・New York 1982, 1.Bd., S.78-84.

(7) Ebenda, S.78.

(8) Ebenda, S.78-79.

(9) 拙著『童話を読み解く――ホフマンの創作童話とグリム兄弟の民俗童話――』同学社、一九九九年、三一七-三一九頁参照。

(10) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、一九八八年、五九〇頁参照。以下、この事典からの引用と参照に関してはこの版に従い、「イメージ・シンボル」と略記して、本文引用末尾に頁数を付す。

(11)『良心　道徳意識の研究』金子武蔵・編、以文社、一九七七年、参照。

(12) 同書、一-二頁参照。

(13) Vgl. Jolles, André: Einfache Formen. Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1972, S.218-220. / Lüthi, Max: Volksmärchen und Volkssage. Zwei Grundformen erzählender Dichtung. Francke Verlag, Bern 1975, S. 14-15.

(14)『良心　道徳意識の研究』、上掲書、二頁参照。

(15) 同書、三頁参照。

(16) Vgl. Der große Duden. Band 7, Etymologie. Bibliographisches Institut, Mannheim / Wien / Zürich 1963, S.221.

(17)『良心　道徳意識の研究』、上掲書、三頁参照。

(18) 同書、三-五頁参照。

(19) 中村正雄『良心の自由――倫理学的考察――』晃洋書房、一九九四年、参照。

(20)『良心　道徳意識の研究』、上掲書、五七-五八頁参照。

(21) 同書、一八頁。
(22) 中村正雄『良心の自由――倫理学的考察――』、上掲書、五八-六〇頁参照。
(23) エドガー・ポー『ウィリアム・ウルスン』、『黒猫・黄金虫』所収、佐々木直次郎訳、新潮社、一九八六年、六八頁。
(24) 同書、八九-九〇頁。
(25) 拙著『悪魔の霊液――文学に見られる自己の分裂と統合――』同学社、一九九七年、一九九-二二二頁参照。
(26) 拙著『童話を読み解く』、上掲書、三六一-三六三頁参照。
(27) フリッツ・マルティーニ『ドイツ文学史――原初から現代まで――』三修社、一九七九年、六一-六二頁参照。